

<幼稚園教育>

豊かな感性を育てるための援助の工夫 ー劇遊びを通してー

糸満市立兼城幼稚園教諭 稲 嶺 彰 子

内容要約

豊かな感性を育てるために、劇遊びを通して、幼児の気づきや発見を受け止める、イメージを共有し幼児と一緒に環境を整える、友達や教師と一緒に遊ぶことを楽しむ、共感し合える場を工夫するなどの援助をしてきた。その結果、絵本の場面をイメージすることにより想像力が高まり、その子なりの表現を受け止めることにより安心して自分を表現するなど感情の育ちがあった。また、五感を働かせ小道具作りをすることにより感覚や想像力が育ち、生き生きと遊びを楽しみ、その楽しみを友達と共有・共感するなど、豊かな感性が育ってきた。

【キーワード】 豊かな感性 劇遊び 友達や教師と遊ぶ楽しさ その子なりの表現 共有・共感

目 次

I	テーマ設定の理由	11
II	研究内容	12
1	感性	12
2	劇遊びとは	13
III	保育実践	16
1	活動名	16
2	設定の理由	16
3	保育目標	16
4	保育計画	17
5	保育活動の展開	18
6	保育の省察	19
7	幼児の変容	19
IV	研究の成果と今後の課題	20
1	研究の成果	20
2	今後の課題	20

＜幼稚園教育＞

豊かな感性を育てるための援助の工夫

－劇遊びを通して－

糸満市立兼城幼稚園教諭 稲 嶺 彰 子

I テーマ設定の理由

美しいものを美しいと感じ、よいものをよいと素直に言える心、幼児の豊かな気づきは周りの大人のかかわりや受け止めによるところが大きい。みずみずしい幼児の心に丁寧に寄り添い感動を共にしていく中で豊かな感性が育っていくと考える。しかし、近年、親の仕事の忙しさや夜型の生活など、生活の乱れが子どもにストレスを与えているのではないか。ゆとりのない生活が親と子の触れ合いの時間を奪い、周りの自然や身近な人とのかかわりが希薄になり、気づく、感動する、共感し合う機会を奪っているのではないと思われる。

幼児は周りの環境から、様々なことを感じとっている。園庭で葉っぱや木の実を見つけてレストランごっこやお家ごっこが始まったりする。ひらめきをひらめきのままに表し、そこに仲間が加わって楽しさを共有している。「これは何々ね。」「ここは海ってね。」と、空間に体や言葉を通して自分のイメージを出している。幼児の心に生まれる価値やひらめきは、自分なりに表現したり、周りの人に受け止められながら、その子の内面の育ちになる。幼児のこうした楽しみを生活や遊びの中で繰り返し体験し教師や周りの友達と共有し合うことが、表現する意欲や感性を育てていくと考える。

しかし、これまでの保育を振り返ってみると、生活発表会が近づくにつれ、様々な出し物の時間配分が気になり、大事にしたい幼児の気持ちの表れより、劇遊びの筋書きや表現の方法に意識がいつてなかったか。劇遊びに向かう前のごっこ遊びの段階を楽しむ経験がもっと必要でなかったか。劇遊びの環境構成は魅力ある場であったかということが反省させられる。また、自分の思いをうまく表現できない幼児に対して、内面を的確に読み取れていたか、感動体験が味わえる環境の工夫が十分だったか。援助の在り方はこれでよかったのかなどの課題もある。

幼児は、自分の気持ちを表し、周りの友達からなんらかの反応が返ってくことで刺激を受ける。さらに、他人との衝突を繰り返しながら集団へのかかわり方を学び、だんだん大勢の仲間と遊ぶことの楽しさを覚えていく。幼児が楽しんでいる遊びを一緒に楽しみ、じっくり幼児の気持ちを聞くと、たとえ拙い表現でもその子なりに心を動かしていることが分かる。幼児の思いや楽しみを受けとめ、受容していくことが大切である。自分の思いを表現するということは「おもしろいなあ。」「やってみたいな。」というきっかけが必要になってくる。自然との触れ合いや友達との生き生きとした生活や、絵本の読み聞かせも楽しい体験になる。

そこで、表現したくなるようなワクワクする環境作り、友達や教師と楽しさを共有していく場作りをしていくと共に、それぞれの感性で表現したものを受けとめた劇遊びをしていくことで、豊かな感性が育っていくと考え、本テーマを設定した。

＜研究の視点＞

- 1 劇遊びのイメージが膨らむような環境構成と援助の在り方を探る。
- 2 友達や教師と遊ぶ楽しさや喜びが味わえる場、共感し合える場の工夫を探る。

Ⅱ 研究内容

1 感性

(1) 感性とは

感性と表現に関する領域「表現」には、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、想像性を豊かにする。」とある。

感性とは理性に対する用語である。理性とは論理的に物事を考え、判断する能力をいうのに対し、感性とは物事を感じ取る能力である。感性を構成する要素として感情、感覚、想像力、共感性があげられる。

- ・感情 価値に触れた感動や思いを意欲につなげる感性

常に豊かでみずみずしい感受性を失わず、明るく行動的な生き方の基礎は幼児期にこそ形成される。

- ・感覚 五感、体感、感受性等の感性

見る、聴く、嗅ぐ、味わう、触れるという五感を通して対象とかかわり、体で感じる感性やわずかな違いや変化、雰囲気を感じ取る感性。自然にふれたり、遊びの中で体、指先を使って、五感を総動員し、絵を描いたり、作ったり、見立てる遊びをしたり、いろいろな経験をすることで感性を育てていきたい。

- ・想像力 受け取った情報をもとにして、想像したり、構想したりする感性

「こうしたいなあ。」「こうありたいなあ。」「こうなりたい。」など、現実にはない未来に対してあるヴィジョンを描き、その実現を目指して努力を重ねていく生き方には希望があり、活力がある。現実ではないけれども真実でありたいと願うことであり、もし真実だったらという架空の世界へ遊ぶことである。「ごっこ遊び」「劇遊び」というのは、仲間たちと架空の世界を共有して遊ぶことなのである。

- ・共感性 立場を越えて感情や考えを受け止めようとする感性

幼児は遊びの発達と平行して様々な表現の方法によって自己の感情や心の動きを仲間や集団に伝えようとするようになる。こうした自己と他者との表現の伝え合いの中では、イメージの「共有」や「共感」ということが展開される。

幼児の感性が生かされている姿としては、「意欲的である」「個性的である」「共感的である」「自発的・自主的である」という点から見ることができる。

(2) 感性と人間関係

幼児期は、家庭における保護者などとの関係だけでなく、他の幼児や家族以外の人々の存在に気づき始め、次第にかかわりを求めるようになってくる。初めは、同年代の幼児がいて、別々の活動をしながらも同じ場所で過ごすことで満足する様子が見られるが、次第に、言葉を交わしたり、物のやり取りをしたりするなどのかかわりをもつようになっていく。そして、ときには自己主張のぶつかり合いなどを繰り返しながら友達関係ができ、やがて、幼稚園などの集団生活の場で共通の興味や関心をもって生活を展開する楽しさを味わうことができるようになると、更に友達関係は広がりを見せるようになっていく。このような対人関係の広がりの中で幼児は互いに見たり、聞いたりしたことなどを様々な方法で伝え合うことによって、今までの自分のイメージにない世界に出会うことになる。

幼児はこのようにして、一人で活動するよりも、何人かの友達と一緒に活動することで、生活がより豊かに楽しく展開できることを体験し、友達の大切さに気付いていくことになる。

豊かな環境から感動を得て、その感動を友達や教師と共有することによって一層感性は磨かれていく。幼児は、あるものに出会い、その結果、心が揺さぶられて感動すると、感じていることがそのまま表れる。その表れを教師が受け止め、認めることによって、幼児は自分の感動の意味を明確にすることができる。また自分と同じ思いをもっている幼児に出会うと自分の感性に自信をもち、一方、自分と違う思いをもっている幼児に出会うと自分とは違う感性を知ることになり、結果としていろいろな感性があることを知ることになる。このように友達との感動の共有が、幼児一人一人の豊かな感性を育てていくことになるのである。

(3) 感性と表現

幼児は毎日の生活の中で、身近な周囲の環境とかかわりながら、そこに、限らない不思議さや面白さなどを見つけ、美しさや優しさなどを感じ、心を動かしている。そのような体験の様子や心の動きを自分の声や体の動き、あるいは素材となるものを仲立ちとして表現する。幼児はこれらを通して感じる、考える、イメージを広げることなどの経験を重ね、感性と表現する力を豊かにしていく。さらに、自分の存在を実感し、充実感を得て、安定した気分で生活を楽しむことができるようになる。「表現」ということは、ただ単に何かを表にあらわすということではなく、周りにあるものに感覚を働かせて、いろいろなことを感じとめ、それを元にはじめて外へ向かって現していくことなので、感性と表現は切り離すことはできない。

(4) 豊かな感性を育てるための環境構成と援助の工夫

① その子なりの表現を大切に、表現する楽しさを引き出す

表現する力は、教師が教えて育つものではなく、自分が心から楽しかった、面白かったと思ったときに何らかの方法で表現したくなるものである。ところが、どんな楽しい体験をしても、表現したくなる環境がなければ、ふくらんだ気持ちはしぼんでしまう。その思いを聞いてくれる教師がいて、上手に気持ちを引き出すことや、作ってみたいと感じる材料や素材が保育室に置かれているなど、作ったものを使って遊べる場や空間が確保されていることが大切になってくる。

幼児は自分なりの表現が受け止められる経験を繰り返す中で安心感や表現の喜びを感じる。これらを基盤として、幼児の思いを音や声、身体の動き、色や形などに託して日常的な行為として自由に表現できるようにすることが大切である。幼児は、さまざまな場面でこのような表現する楽しみを十分味わうことにより、やがて、より分化した表現活動に取り組むようになる。

② 友達とのかかわり、伝え合うことの楽しさを味わう

様々な出来事と出会い、心を動かす体験をするとその感動を教師や友達に伝えようとする。その感動が相手に伝わったと分かることで、さらに感動が深まる。感動体験が幼児の中にイメージとして蓄えられ、表現されるためには、安定した温かい人間関係の中で、表現への意欲が受け止められることが必要である。このような経験を積み重ねることを通して幼児同士が伝え合う姿が見られるようになる。

(5) 豊かな感性が育っていく過程（表1 14ページに掲載）

2 劇遊びとは

(1) 劇遊びの特性と意義

幼児は心が躍動し、安心して自分を伸び伸びと出して動けるようになると、自分の内面を様々な表現して遊ぼうとする。特に自分の好きなもの、心を動かされたものには、なりきって真似をしたり、自分なりにイメージをふくらませたりしてごっこ遊びを楽しみ、次第に劇遊びへと展開するようになる。

劇遊びはごっこ遊びの発展的なものであり、ごっこ遊びよりストーリー性があり空想の世界も広がり一人一人がそれぞれの役になりきって共通のイメージのもとに、身体で感情や心情を表現する活動である。劇遊びは必要に応じてお面や小道具などの絵画的な表現、歌やリズムカルな体の動きを伴う音楽的な表現活動の分野が含まれる。また、役になりきっての言語表現、心情表現活動などの多様な分野が一体となり、様々な表現活動が混在している。劇遊びは①自分の思ったことや感じたことを表出して情緒が安定する。②友達とかかわりあって遊ぶことによって、社会性が育つ。③役になりきって心情表現することで感性が豊かになる。④イメージをわけさせたり、膨らませたりして想像力が育つ。⑤言葉、身ぶりなどによる表現、小道具などの製作を通して様々な表現力が育つ。など幼児にとって様々な効果が期待できる集団遊びである。

(2) 劇遊びの年間計画（表2 15ページに掲載）

表 1 豊かな感性が育っていく過程

幼児の生活	教師の援助 (○) と環境構成の工夫 (●)	育つ感性
イメージする	○共通の体験, 又は絵本の読み聞かせなどを通してイメージをもつ ○場面を話し合ったり, イメージしたりする時間をもつ ○教師自身も豊かなイメージをもてるようにする	・想像力
↓		
イメージを共有する	○幼児の感じたこと, 考えたことの表現を受け止める ○幼児の感じたこと, 考えたことの表現を読みとる ○教師が媒介になり会話しながらイメージを共有化していく	・共感性
↓		
友達や教師と一緒に遊ぶ (共通体験) ことによりイメージを共有する	●時間を十分とり, 遊びを楽しむ ○一緒に楽しむ経験をすることにより, よりイメージを共有しやすくする ○表す活動の中でまた, 感じ考えることができるように友達の表現に気づかせたり, 認めたりして取り上げていく	・共感性 ・想像力
↓		
身に付けるものを自分なりに工夫して作る	○お面や衣装, 小道具など必要なものを考えたり, 作ることを通して絵本場面を想像したり, 楽しんだりしながらイメージを描いていけるようする ●素材となるものを十分に準備し, 子どもの発想や考えや願いが叶うよう援助していく	・感覚 ・想像力
↓		
遊びの継続	●効果音を入れることにより, より遊びが楽しめるようにする ○劇遊びを楽しむ時間を十分にとる ○十分に遊び込んで飽きてきた子へは, その子の興味・関心はなにかを探りながら, 柔軟な姿勢で援助を考えていく	・共感性 ・感情 ・想像力
↓		
その遊びを繰り返すことの楽しさ	○いろいろな役を交代して遊べるようにする	
↓		
内容を豊かにしていく楽しさ	●どうしてももっと劇遊びが楽しくなるか子ども達と考えたり相談したりしながら, 環境の再構成をしていく ○子どもの表現に信頼を寄せて任せていく	・共感性 ・感覚
↓		
友達と一緒に進めていく楽しさ	○学級全体で取り組んだりなど, 友達と遊ぶ楽しさを味わえるようにする ○友達のしていること, 作っているもの, 話していることなどから自分なりのイメージをだんだんはつきりもつことができたり, イメージを豊かにしていけるようにする	・感情 ・共感性 ・想像力
↓		
人に見せる楽しさ	○見る側に立って声の大きさや動きなどに気づかせていく ●見せたい気持ちを大事にし, 発表の場を作っていく	・感情 ・共感性

豊かな感性の高まり



豊かな感性が育つ

表2 劇遊びの年間計画

	一学期（4月～7月）	二学期（9月～12月）	三学期（1月～3月）
幼児の姿	慣れない園生活のために自分の気持ちを思いのままに表出しない子がいたり、自分の興味のまま行動する子がいたり、表現の仕方に個人差がある	- 遊びが活発になるにつれて自分の気持ちを伸び伸びと表現する幼児が多くなる - ごっこ遊びなどで、そのものになりきって自分なりの役を意識した言葉を使おうとする	- 自分なりの課題や目的に向かって積極的に取り組もうとする姿が見られる - 見る側と演ずる側の役が自然にできるようになる
ねらい	- 学級の中で安定し、自己を表出したり、自分なりに動いて楽しむ - ごっこ遊びや集団遊びの中で好きな役になって遊ぶことができる - 自分の思ったことや、やりたいことを言葉や動きに出していく	- 友達やグループの中で自分の考えやイメージを言葉や動きなどで表現する - ストーリーに沿ってみんなと一緒に表現する楽しさを味わう - 身に付けるものを作ったり、動きを自分なりに工夫する	- 学級全体で劇遊びに取り組み、課題を達成する喜びや表現する楽しさを味わう - 友達やグループと協力し合って、活動に必要なものを作って学級全体で表現したり演ずることを楽しむ
活動選定の観点	- 登場人物の複雑でないもの - ストーリーが簡単なもの - リズムカルで繰り返しのある楽しいもの - 絵本や身近な遊びで楽しいもの	- 自由に発展しやすいもの - 身近な題材で親しみやすく共感の持てるもの - 思ったことを筋道立てて言葉や絵で表現しやすいもの	- 生活の身近なところから次第に創造的に広がることができるもの - 物語性のある楽しいもの
内 容	- 絵本の読み聞かせを繰り返し聞く - 好きなものになって遊ぶ - 指人形、ペープサートで遊ぶ - 伝承遊び、集団遊びをする	- リズムカルな言葉を喜んで言う - 自由な言葉のやりとりを楽しむ - 遊びの中で気づいたことを話し合う - 役を交替しながら友達との遊びを楽しむ - 友達と協力して簡単な小道具を作る	- 友達と考えを出し合ったり、表現を工夫する - 考えを出し合い、ストーリーにないセリフでも考えて言えるようにする
教師の援助の工夫	- 一人一人とのかかわりを多く持つ - 一人一人が安心して遊びを見つけて取り組めるように遊具の種類や数を十分準備する - 幼児の素朴な言葉や表現を大切に受け止めるようにする - 作ったり描いたり、歌ったり、動いたりする表現活動を自分達で取り組めるよう十分な素材やカセットレコーダー等、準備し環境を整える	- 幼児一人一人の発想を受け止め表現する意欲を高める - 思いっきり動く楽しさ、快さなどを味わわせるようにし、教師も幼児と一緒に動きながら楽しい雰囲気作りをする - 経験したことや、絵本などで興味を持った部分が、個々のイメージや動きになって自由に遊びの中に取り入れられるようにする - 一人一人の様々な動きや表現を認め、励ましたりして学級全体へ刺激として広めていきながら活動を進めていく	- 自分達でやりたいという意欲を大切にし、個々の動きや言葉、イメージなどを受け止めていく - 劇遊びをみんなの前で演じる機会を設け、どの幼児にも表現する喜びや満足感、自信を持たせていく - 歌や効果音、リズムなど劇遊びを盛り上げるいろいろな要素を取り入れながら教師と幼児で共に作り上げていく喜びを感じ取らせる

Ⅲ 保育実践

1 活動名 「おおかみと7匹のこやぎ」の劇遊びをする。

2 設定の理由

(1) 教材観

グリム童話「おおかみと七匹のこやぎ」は幼児がよく知っている絵本である。幼児はおおかみの話が好きである。お母さんの留守にトントンと誰か来るだけで「こわい」と思う。自分がこやぎになって怖さを経験している。また、幼稚園の裏にやぎ小屋があり、放し飼いにされたやぎが園から見えたり、散歩しながらやぎを見たり触れたりできるので幼児も身近に感じている。遊び始めると時計にかくれたいとちびやぎを選ぶ幼児、追いかけるより追いかける方がいいとおおかみ役になる幼児もいて役選びの理由もそれぞれで面白い。絵本のホフマンの絵は最後のページでこやぎが心地よさそうなベットの中で母やぎに見守られ、窓の外からお月様に見守られている。今日一日怖いことがあったけれどよかったなと安心感が伝わってくる。

絵本の読み聞かせを通して幼児がイメージしやすく、劇遊びに必要な小道具作りなど幼児と教師と一緒に場を作り出していく経験が容易で、繰り返しのストーリーがのりやすい、幼児の興味・関心もあり楽しく遊べる教材である。

(2) 幼児観

一学期に「おおかみさん」ごっこで、森の動物たちとおおかみの掛け合いを楽しみ、鬼ごっこのように追いかけたり追いかけられたり、ごっこ遊びを楽しんだ経験がある。幼児の遊びを見ると、いろいろなものに気づき、発見し、触れたり、つくり出すという動きをしている。劇遊びに必要なものを自分たちで工夫して作る楽しさを味わうとともに、役になりきって表現する楽しさやストーリーの中に入って、こやぎになり、本当につかまえられるようなスリルを味わっている。また、ごっこ遊びでは、自分のイメージを出していく楽しさや友達と支え合ったり、共有する楽しさを味わっている。

次々といろいろなイメージがわいてきて、おおかみを見分ける方法や「時計の扉を閉めるひもがあった方がいい。」「窓がもっとあったほうがいい。」などアイディアを出したり絵本の世界を豊かに楽しんでいる様子がある。保育者自身も仲間として楽しみ、目の前の幼児の感性や個性の豊かさに気づき、幼児が自分の思いを自分なりに安心して表現することのできる環境をつくること。保育者が安定した受け手となっていくことが表現を豊かに育てる上で大切になってくる。

(3) 保育観

幼児の劇遊びは本格的な劇とは違い、物語の筋通りに進むとは限らない。ストーリーがカットされていたり、大道具などがなかったり、見ている人には分かりにくいこともある。学級便りなどを使って、どんな内容の劇をどんなふうに幼児と取り組んでいるか、楽しんでいる様子、工夫している様子など、あらかじめ知らせたり理解を深める手だてを考えていきたい。

幼児が役になりきって、自分なりに表現している楽しさを味わうゆとりがもてるようにする。教師も一緒に遊びに参加し、「今日は面白かったね。」と共感をもって劇遊びを楽しみ、見立てたものや劇遊びのストーリーが友達とどう共有できるようになっているかということを捉えていきたい。子どもと劇に必要なものを準備したり、描いたり、作ったりしていきたいと考えている。こうして子ども自身が楽しむプロセスというものをしっかり見直すことによって子どもの豊かな表現力の育ちを支えていくようにしたい。絵本の読み聞かせを通してイメージを共有し、ごっこ遊びを十分楽しむことから「おおかみと七匹のこやぎ」の劇遊びを生活発表会へとつなげていきたい。劇遊びを子どもの表現として楽しんでいくことを通して豊かな感性を育てていきたい。

3 保育目標

- (1) 自分なりのイメージを動きや言葉などで表現したり、考えたりしながら劇遊びを楽しむ。
- (2) 自分なりに工夫したり、考えたりしながら劇遊びに必要な物を作る楽しさを味わう。
- (3) ストーリーに沿って、みんなと一緒に表現する楽しさを味わう。

4 保育計画

月	主 な ね ら い	幼児の活動	教師の援助 (○) と環境構成の工夫 (●)
12/3 (水)	絵本「おおかみと7匹のこやぎのストーリー」を楽しむ、自分なりのイメージが持てるようにする	- 絵本を見る - 話し合いをする - 小道具作りをする	○絵本の読み聞かせをすることにより共通のイメージが持てるようにする ●どんな動物がでてくるか確認したり遊びが楽しくなるためになにが必要か話し合ったり、必要なものを工夫して作れるように時間、場所、材料を十分準備する ○小道具作りにも子どものアイディアやイメージを生かせるようにしていく ○いきづまった時は様子を見ながらアイディアを提供したり考えるヒント等、言葉かけしていく
12/5 (金)	自分なりに、工夫したり考えたりしながら、楽しもう		
12/9 (火)	- なりたい役になって劇遊びを楽しむ - 役を交代して遊ぶことにより、違う役を楽しんだりいろいろな気持ちを味わう	- 劇遊びをする - 役を交代して遊ぶ - お面作り、小道具作りの続きをしたり、補修したりする	○その子なりの表現を認め、褒めたり、友達の表現にも気づかせたりしながら、生き生きと自己表現できるようにしていく ●小道具を作ることで劇遊びが楽しくなったり、イメージが描きやすくなるので必要に応じて作れるように材料を準備しておく ○作った小道具を使って遊んでみるにより「おおかみと7匹のこやぎ」の物語を身近に感じることができたり楽しめるようにする ●広さを十分確保するために活動の場をホールへ移動するなど環境の再構成をする ●井戸にマットを敷く、走り回るので障害物を取り除くなど、安全面に十分気をつける ○幼児の様子を見ながら、必要に応じて援助する
12/12 (金)			
12/17 (水)	自分なりにイメージしたり考えたりしながら 劇遊びを楽しむ	- 効果音に合わせて劇遊びをする - 小道具やお面の補修する	●効果音を入れることにより、より劇遊びが楽しめるようにする ○友達の表現にも気づかせていきながら、受け止め、安心して自分なりの動きが出きるようにする
12/18 (木)	(本時) - 自分なりにイメージしたり、考えたりしながら劇遊びを楽しむ - ストーリーに沿って友達と一緒に表現する楽しさを味わう	- 効果音に合わせて劇遊びをする - 話し合いをする	○その子なりの表現を、褒めたり認めたり、受けとめる ●劇遊びに必要な小道具など幼児と一緒に準備する ●破れたら補修するなど必要に応じて援助する ○じっくり幼児の気持ちを聞くことにより、幼児の思いや表現を受け止めていくようにする
平成 16年 1月 2月	学級全体で一つの目標に向かって劇遊びを楽しむようにする  生活発表会	- 効果音に合わせて劇遊びをする - 自分たちで協力して遊びを進めていく	●引き続き劇遊びができるような環境を作っておく ●幼児の様子や動きに合わせて環境の再構成をしていく ○2月に生活発表会があることを話し、お家の方に見てもらい嬉しさや学級全体で劇遊びをすることに期待と意欲を持てるようにする

5 保育活動の展開 活動名 劇遊び「おおかみと七匹のこやぎ」

幼児の姿	・ おおかみの森やこやぎの家など自分達で描いたり製作したものを生かし、教師も一緒にホールに配置し環境を整えている ・ 遊びに使うものを製作して楽しんでいる子、おおかみとの言葉のやり取りや追いかけてっこをしたり、「はないちもんめ」や「ことしのぼたん」等の伝承遊びを楽しんでいる ・ 「あわてんぼうのサンタクロース」などクリスマスソングに合わせて自分たちで振り付けして楽しんでいる		
ねらい	・ 自分なりにイメージしたり考えたりしながら劇遊びを楽しむ ・ ストーリーに沿って友達や教師と表現することを楽しむ	内容	・ 作ったものを身に付けて役になって劇遊びをする ・ 友達と一緒に活動することの楽しさを味わう
保育視点	・ 劇遊びのイメージが膨らむような環境構成と援助の工夫 ・ 友達や教師と遊ぶ楽しさや喜びが味わえる場、共感し合える場の工夫		
時間	幼児の活動	教師の援助（○）と環境構成（●）の工夫	
8:10	◇登園 ・ 朝の挨拶をする ・ 持ち物の始末をする ・ 花への水やり ・ 飼育物の世話	○挨拶を交わしながら、子どもの体調を確認し、一人一人を受け止める ●子どもと一緒に活動の準備をしながら遊びへの意欲を持たせるようにする ●小道具の準備や置く位置を確認したり、テープが巻き戻しされているか事前にチェックしておく	
9:45	◇話を聞く ◇「おおかみと7匹のこやぎ」の劇遊びをする。	●走り回るので障害物を取り除くなど安全面に気をつける ○配役をしっかりと確認するようにすることでスムーズに劇遊びに入っていけるようにする ○セリフは日常の言葉や幼児から出てきた言葉、くり返しのリズムカルな言葉のやりとりを楽しめるように援助していく。また日頃遊んでいる伝承遊びも取り入れて楽しめるようにする ○おおかみとこやぎとのやりとりは、手を見せたり足を見せたり、口を見せたりしている。幼児のアイデアが実現できるようにしていくと共に役の気持ちに沿ったり、イメージが膨らむような言葉かけをしていく ●井戸に落ちる場面はマットを敷いたり安全面に気をつける ●ドアの穴や窓を増やし、ドキドキしたり、共感したり、こやぎとおおかみのやり取りを楽しめるように工夫していく ●時計の中に隠れることができるように段ボール箱で作って遊んでいるが、ちびやぎの人数が増えているので、段ボール箱の時計を増やし、ちびやぎ全員が隠れることができるようにする	
10:10	◇片付ける		
10:15	◇話し合う ・ 自分の思っていること楽しかったこと等を話す。	●効果音を入れることにより場面に変化をつけたり、おおかみが現れる場面、追いかける場面などイメージが膨らむように雰囲気作りをしていく ○幼児の様子を見ながら教師も楽しんで劇遊びに参加し、よりイメージが広がり、より生き生きとした表現となるような言葉かけを考えて援助していく ○こやぎを追いかける場面を一番楽しんでいるので時間をとると共に食べられたこやぎの待機場所を確認し待てるようにする ○明日の遊びへとつなげられるように、子どもと話し合いながら片づけを進めていく ○教師も感じたことを伝えながら、今日の劇遊びの楽しかったこと、困った事など子ども達の気持ちを引き出していけるようにする ○次の遊びへ意欲が持てるように、アイデアを出したり考えたりできるようにする	
評価	・ 自分なりにイメージしたり考えたりしながら劇遊びを楽しんでいたか ・ ストーリーに沿って友達と表現することを楽しんでいたか		

6 保育の省察

(1) 劇遊びのイメージが膨らむような環境構成と援助の工夫

① イメージを共有する

絵本の読み聞かせをし、「絵本の中の季節は?」「おおかみがこやぎ6匹を食べた時間は?」などクイズ形式で考えたりしていった。春、元気一杯はね回るこやぎたちの姿を想像したり、「30分でこやぎ6匹も食べた。」「はやすぎるー。」など驚きの声が聞かれた。また、散歩をしたとき園の近くのやぎ小屋をのぞいたり、身近にやぎを見ることのできる環境もイメージを膨らませるのに役立った。

効果音を入れることにより、イメージをより明確にすることができた。音の大きさなど具体的な援助の在り方をもっと研究し、実践していきたい。

② 幼児と一緒に環境を整えていく

草原、こやぎの家、時計、ドア、井戸など一緒に相談したり、アイディアを出し合ったりしながら環境構成をしていくことでイメージを膨らませることができた。

劇遊びに必要なものを話し合い、幼児から出てきた発想を取り上げたり、幼児のアイディアが実現できるよう援助していくことで楽しんで作ったり、劇遊びに期待を寄せる姿が見られた（お面、石ころ、あめ玉、ハサミと針など）。

効果音で雰囲気盛り上げたり、衣装を着ることで「おおかみと7匹のこやぎ」の劇のイメージをさらに膨らませることができた。

(2) 友達や教師と遊ぶ楽しさや喜びを味わえる場、共感し合える場の工夫

① 教師も一緒に遊ぶことを楽しむ

幼児が日頃楽しんでいる「はないちもんめ」「今年のぼたん」などの伝承遊びを劇の中にも取り入れて教師も一緒に遊んだり、一緒に劇遊びをする中で楽しさを共有していくことができた。

② 共感し合える場の工夫

石ころを詰められたおおかみはどんな感じなのだろう?

新聞紙で作った石ころをお腹に入れると「お腹がいっぱいだー。」と転がっておおかみの気分になったり、お腹を抱えて石ころを詰められたおおかみの気分を共感し合っている場面が見られた。食べられたこやぎが無事で「あーよかった。」「こわかったね。」と話している。それぞれの役の気持ちになって言葉かけをしていくことでお母さんやぎ、こやぎたち、おおかみなど同じ気持ちを教師も味わい、幼児の気持ちを受け止めたり感じ取っていくことにより、共感し合える場の工夫ができた。

おおかみとこやぎのやりとりの場面は、人数に応じて窓を増やすなど環境を工夫することで、おおかみの様子を伺ったり、こやぎ同士、おおかみ同士、共感している姿が見られた。

課題としては見る人、演じる人に分けたり、ナレーターや準備係など仕事の分担を考えたりしていろいろな楽しみ方を工夫していきたい。

7 幼児の変容

(1) 学級全体

活発で積極的な子が多いが、中にはどのように集団にかかわったらいいか模索している子もいる。日常の保育の中で、幼児の小さなつぶやきや表現を読み取りながら、気づきや発見を学級みんなに知らせたり、認めていったり、共感させていくことを意図して実践してきた。

劇遊びの活動を通して、自分の表現が肯定的に受け止められ、認められていくことで一人一人に自信がついてきた。幼児の感性の育ちを想像力や共感性など、感性の構成要素と関連させて考察してみたい。

まず、絵本の読み聞かせを通して、場面を話し合ったり、イメージしたりする時間を持つことによって、「楽しい」「面白そう」「こわいなあ」「あーよかった」など感情の動きが見られた。

劇遊びに必要なものを話し合う場面では「恐竜の骨の粉」「声をきれいにする飴」など幼児の豊かで多様なアイディアが出され、幼児の感じたこと考えたことの表現を受け止めることにより、想像力が育ってきた。

次に、小道具作りでは、いろいろな素材を組み合わせ五感を働かせ作る作業を通して、絵本の場面を想像して楽しんだり、イメージを描いていくことにより想像力が育ってきた。マットを牛乳パックで囲んだものを井戸に見立てたり、新聞紙の固まりを石ころに見立てたりなど、様々な経験を通して感覚が育ってきた。また、作った小道具を使い、遊ぶ経験を通して「だんだん楽しくなってきた」「も

っとやりたい」など意欲が見られ、より物語に親しみ想像力が育ってきた。

また、その子なりの表現を受け止め、友達の表現にも気づかせていくことにより、安心して自分を表現し、教師が媒介になり会話しながらイメージを共有化していくことにより、「面白いね」「こわかったね」「たすかってよかった」など共感したり、イメージを共有したりなど共感性が育ってきた。

さらに、時間を十分にとり、遊びを楽しむ中で、気持ちを表す子、受け止める子、表現のやり取り、様々な表現行為が見られた。表現を仲立ちにして「ちびやぎなのに食べに来てインチキ」「お母さんやぎが帰ってこない」等、様々な葛藤やハプニング、楽しみ、関係が作られてきた。それらは、ストーリーの中の役割を確認していくと共に、役割の気持ちと自分の気持ちを重ね合わせたり、自分の気持ちを掘り起こしたりなど、感情、感覚、想像力、共感性を揺さぶることとなり豊かな感性が育ってきた。また、2月の生活発表会では、たくさんの観客を前に、「おおかみと7匹のこやぎ」劇遊びを学級全員で、生き生きと目を輝かせ楽しんでいる姿が見られた。

(2) Aさんの変容

自分の学級だけでなく、隣の学級とも交流し、おおかみになって食べてきたりなど、積極的に遊びに参加している。表現を楽しんでいる姿を認めたり、取り上げて他の友達に知らせることによって自信をつけている。しかし、自分なりに遊び込んで楽しみを十分味わったせいか、12月12日は「もうやらない」早々と活動を終えてしまっていた。どのように興味関心を持続させていったらいいか手だてを考えていると、絵本をめくっている姿がある。「先生、おれたち針とハサミがないよ。作りたい。」と言うのでチャンスと思い、一緒に針とハサミを作る。Aさんの五感を触発するように努める、時間や場所を保障する、考えやイメージを形にすることで、また劇遊びの活動に戻ってきた。作ったハサミを使いたいと、おおかみ役からやぎの役にお面も作り替えて加わっている。自発的にテープをかけ遊ぶ姿が見られたりなど、環境に意欲的にかかわって心を動かしている姿から感情、感覚、創造性の育ちが見られる。

(3) Bさんの変容

集団生活が初めてでおとなしくなかなか自分から話そうとしない。一緒に活動したり、友達との遊びに誘い入れるように援助してきた。クラス全体で「おおかみと7匹のこやぎ」の劇遊びを一緒に楽しみ、友達の様々な表現が受け入れられたりする中で、少しずつ自分の思いや考えを表すようになってきた。また、自分の表現が認められたりする経験を通して、安心して自分を出したり、遊び自体を楽しむようになってきた。Hさんと一緒に男児9人に混じっておおかみ役を選び、石ころをお腹に詰め込み「お腹がいっぱい」を表現したり、井戸に飛び込むシーンではダイナミックに飛び込む姿など個性的な表現が垣間見られるようになってきた。自分の思いを話したり、表現したことが認められたりする経験から自信を持ち、それがうまく循環していくことによって想像力、共感性が育ってきた。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 幼児の感性は、周りの人に受け止められ認められることを通して、安心して自分を表し、友達や教師と遊びを楽しむことで高められることがわかった。
- (2) 友達の様々な感じ方、表現が刺激となりの友達の発想に助けられながら、イメージを豊かにし、共感・共有できる友達の存在があることで豊かな感性を育むことができた。

2 今後の課題

- (1) 心を揺さぶる体験や、幼児の興味・関心に沿った絵本を多く読み聞かせし、友達と共感、共有することで豊かな表現につながるよう環境を工夫する。
- (2) 豊かな感性を育むためには、教師自身も豊かに心を動かすことが大切である。そのことを踏まえ、幼児の心の動きを見つめる目、自分の心の動きを見つめる目を持ち、研鑽を深めていきたい。
- (3) 表現活動を通して、豊かな感性を育てるため、家庭との連携の在り方を工夫する。

<主な参考文献>

文部省	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館	1999 年
岸井勇雄 小林龍雄 他編	『表現 I 感性と表現』	チャイルド社	2000 年
黒川健一 編著	『豊かな表しに向けて』	フレーベル館	1995 年